＋

２０２１年

10月第3・4・5週の主日礼拝説教要約

・１０月１７日：ル カ 福音書１０：２５-２９.

「 受け継がれる命 」

・１０月２４日：ル カ 福音書１０：３８-４２.

「 神に聴く時 」

・１０月３１日：ル カ 福音書１１：１-４.

「 教えられた祈り 」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

説教《受け継がれる命》

人として、隣人として為すべき行いをしたサマリア人のことを、律法の専門家はこう表現しました、「その人(怪我人)を助けた人」であると。現代人のユダヤ教のラビは、ルカ福音書に記されたこの譬え話(エピソード?)を論じて、このサマリア人のことを、こう表現します、「たまたまその人が善人だっただけ」であると。２０００年の時を経ても、両者には共通する表現として、その善行を働いたのが特定の「サマリア人」だったことには一切言及しません。

旧約聖書に複数回出てくる「サマリア」に関する記述として、ユダヤ人は何一つ好意的な表現を使用しません。そうです、彼らは永久にユダヤ人の敵であり続けるのです。

ダビデ、ソロモンの統治を経て、イスラエル王国は南北に分裂し、その後一度も歩み寄ることなく北は滅亡し、様々の民族の居住地となり、南は歴代の強国の属州となり、僅かな独立期間を除き、自治権もあったりなかったりで、その恨みがなぜか、亡き北イスラエルの亡霊と化したサマリアに向けられていたのです。今も昔も、ユダヤ人の深層心理の中には「善いサマリア人」は一人として存在しないのです。

この信念を逆手にとったのが、イエスの譬えです。エルサレムからエリコへの下り坂は当時でも犯罪多発地帯で、譬えに出てくるような事件は枚挙にいとまがありません。被害者の通行人はエルサレムを起点としており、ほぼユダヤ人の可能性が高く、その人が追剥ぎに遭います。その後、同胞であるはずのユダヤの祭司が、またレビ人が、負傷者を見て見ぬふりをして傍らを通り過ぎます。負傷者は、今しばらく放置されます。

そこに一人のサマリア人が通り掛かり脚を止めます。地獄で仏、さながらに、負傷者はその善意の通行人に介抱され宿まで運ばれ、改めて手当てを受けます。さらにこのサマリア人は、その全ての費用の負担を宿主に申し出たのでした。永遠の命を受け継ぐために(ルカ福音書10:25)。

実話である可能性を秘めたこの譬え話が、イエスを試みようとした律法の専門家に対して語られた時、神が求める「隣人愛」の形が鮮明になります。その愛とは、特定できる隣人に注がれる愛、とは違うもの。そうではなく、全ての人の隣人となり、隣人としての愛を相手に注ぐこと。これが神が人に求めている愛の姿であることを教えています。

説教《神に聴く時》

永遠の命のためにも働きなさい、人助けをしなさいと説いたイエスはその足でベタニアのマルタとマリアの家を訪れます。神のために、また人のために行動することは、イエス自身が弟子達やその他の人々に模範を示していることであり、人類はその意志を受け継がなければなりません。

イエスがその家を訪れた時にも、マルタはイエスを持て成すためにせっせと働きます。ところが今度は、まさにその行いが問題視されてしまうのです。イエスがその家を訪れて、何かを語りだすまでの経緯の詳細は不明です。ただ、その話に聞き入ったのはこの二人姉妹ではなく、妹のマリアだけでした。イエスは一体、彼女に何を語ったのでしょう？、読者が一番知りたいのはそこです。残念ながら著者は、その話の内容を開示しません。好意的にとらえるならば、イエスは姉妹の家庭のプライベートな話題を語っていたのかもしれません。

マリアはイエスの前に座って、その話に凝っと耳を傾けています。反対にマリアは持て成しのために、あくせく働いています。嘗て教会婦人会論で繰り返し問題視された聖書の箇所です。愛餐会の準備は礼拝中でも許されるのか否かの結論は、それぞれの教会の判断に委ねられる「実践神学論争」となりました。

それはともかく、マルタもマリアもイエスのための行動を起こしていることにかわりはありません。マルタは全身を使って、マリアは聴覚を研ぎ澄まして。神ではない人間は、この二種類の行動を同時に行なうことはできません。できない時には、どちらか一つを選ばなければなりません。「イエス様、あとでもう一度、同じことをお話ください。」とせがんだ人の記録は、聖書の中にはないのです。つまり、イエスはけっしてマルタを排除していないにもかかわらず、マルタが一方的にイエスから遠ざかっているのがこの場面なのです。

腰を据えて話を聴いたり、語り合ったりすることの苦手な人はたしかにいます。その場を立ち去るためには、些細な口論も辞さないという人も。聴くことの苦手な人は、読むことも、語ることも苦手です。聖書に記されていることと、正反対の価値観をもつキリスト教徒はいくらでもいます。今もその人にイエスは語りかけます、「正しい方を選びなさい」。

説教《教えられた祈り（宗教改革記念日）》

いまから４年前、世界では宗教改革５００年を祝う式典があちこちで開催されました。その３年後の２０２０年に、世界中が新型コロナウィルスによる大パニックに陥ることは、誰にも予想不可能なことでした。

マルティン・ルターによる宗教改革の開始から１０年後の１５２７年にヨーロッパの北部を中心に、ペストの大流行が起こります。

ルターによると、その時、ヴィッテンベルク（宗教改革の震源地）の町の人々は注意を怠り、「ペストや死から身を護ることを蔑ろにし、薬を用いることを嘲り、蔓延地域に出向いては飲食を共にし・・・・・神を試みている」という有様でした。その時の彼らの言い草は、「もし神様に、我々を守る気がおありなら、用心や薬に頼らなくとも、そうしてくださるであろう」というものです。これに対し、ルターは警告します、「愛する友よ・・・・・・必要もないのに人に会ったり、不必要な場所に行ったりすることを避けなさい。通常の火事を消すのを手伝う人と同じように行動しなさい」。ルターはペストを市中の火事に譬えて、人々に分かりやすく語りかけました。

啓蒙時代の１００年前に、ルターは現代の政府の方針と同じ事をうったえていたのです。

ルターが着手した活版印刷による、ルター訳のドイツ語聖書が出始めた頃、これを入手できた人はまだ、そう多くはいません。人々がよく知る聖書の言葉はごく僅かで、誰もが知っている聖句は、マタイ福音書の６章９節以下にある「主イエスが弟子たちに教えた祈り（＝主の祈）」でした。それまでラテン語でしか祈られることのなかったこの祈りの意味だけは、それぞれの母国語にも訳されており、ルターは度々、この祈りを引用してメッセージを語りました。

ただ、この祈りの中にある神の御心が悪用されることが問題視されます。それは、「もし、神様に我々を守る気がおありなら・・・・そうしてくださるであろう」。これは、「御心が天になる如く地にもなる」ときに「われらは、悪いものから救い出される」であろうという慢心を生じさせてしまいます。しかし、なぜかルカ福音書の平行記事には、この問題の箇所がありません。天に任せるよりも、実践を重んずるルカならではの特徴が、ここにも見てとれます。人事を尽くして、天命を待つのは、古今東西、共通の定めなのかもしれません。